

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	清家 理
論文題目	医療ソーシャルワーク機能の実証的研究—地域医療現場をフィールドに—		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究は、医療ソーシャルワーク機能を地域医療の臨床現場に即して実証した研究であり、5章から構成されている。第1章では、医療と福祉をつなぐ社会的背景を探り、医療保険福祉政策の歴史と動向を紹介した。第2章では、その大きな政策課題とされる在宅介護を取り上げ、「要介護老人支援に関する調査」とその分析報告を行った。197名の介護者の例を見ると、50～60代の無職の女性が、80代以上の脳障害を持つ傾向にある要介護レベル3以上の老人の世話をする傾向にあった。介護者が感じるニーズとしては、役所手続き、外出介助、服薬管理が目立って多く、介護者自身の健康管理が心配であることが浮き彫りになった。さらには、受け入れ先の事前確保と、医療保険制度利用や24時間体制の医療介護支援に関する相談が要望されていることが明らかになった。</p> <p>そうした第2章で証明されたニーズに対して、第3章では、医療ソーシャルワーカーの提供できる機能などについて、先行研究を網羅的に取り上げ、その整理と機能の分析視座の提示を試みた。結論として、医療ソーシャルワークが目標として掲げている機能は、Ⅰ：患者や家族を取り巻く支援環境の体制を整える機能と、Ⅱ：患者や家族が有する力をサポートする機能とが設定され、前者には、情報収集的機能、連絡調整機能、コンサルテーション機能、後者には支持的機能、教育的機能、仲介的機能、代弁的機能、に分類されることを明らかにした。</p> <p>次に第4章では、医療ソーシャルワーク機能の分析視座に照合させて、がん患者の退院支援の実態調査と臨床例分析を実施した。調査フィールドの選定は、近年の医療保健福祉政策に重点課題として挙げられている、在宅医療と介護、がん医療、地域医療連携を基軸とした。その結果、調査フィールドは在宅医療支援診療所となった。283名の基礎データをアンケート調査や医療ソーシャルワーカー支援記録等から抽出し、統計解析した。また、これらの数量的データを補完するものとして、典型的と思われる臨床例の時系列的分析を実施した。なお、調査に伴う倫理的配慮は個人情報保護法、疫学研究に関する倫理指針を厳守した。</p> <p>がん患者に対する退院支援の実態調査および事例分析では、すべての機能が網羅的に果たされていることが示された。その詳細は、3点に集約される。(1) 医療ソーシャルワーカーが、患者や家族のインフォームドチョイスを支える目的で、支持的機能をベースに、情報収集的機能、教育的機能、仲介的機能を高い割合で実施していた。(2) 院内・院外における連絡調整(連絡調整機能)や問い合わせ(コンサルテーション機能)が円滑に行われた場合、患者や家族のニーズとフォーマルサポート、インフォーマルサポートをつなぐ潤滑油(仲介的機能)を担った。(3) 患者や家族の状況に応じたオーダーメイドのサポートチームは先導役を担い、患者や家族側に立った支援(代弁的機能)</p>			

ができるようになった。

以上により、患者や家族が有する力をサポートしながら自律を促し、患者や家族を取り巻く環境へ網羅的に働きかける医療ソーシャルワーク機能が示され、その専門性が実証された。この分析により、ソーシャルワークの理論と実践の整合性を見ることが出来る。ただし、課題として、医療ソーシャルワークの機能について今後も同様な調査の実績を増やすことによって、実証性を高めることが望まれる。

(論文審査の結果の要旨)

厳しい経済情勢における超高齢化社会の到来の影響で、医療や福祉の供給体制は、効率化へと大きく変遷して、政策や医療制度の推進により、医療と福祉の舞台は、病院から地域の在宅医療や在宅介護へと変容している。相反する効率化と質の保持という事象の中で、地域連携や多職種協働という「つなぐ」体制が新たに台頭した。最近、「つなぐ」作業に診療報酬が付き、その役割を医療ソーシャルワーカーが担うと規定された半面、効率化の下で転院促進の役割等を担うことにより、専門的機能が常に揺らいでおり、その影響で高い離職率を引き起こしている。先行研究では、医療ソーシャルワーカーの活動が、所属する機関によって流動的な「役割」に留まり、「機能」として実証されていない。それに対して、本研究は新しい実証的研究と言えよう。

また先行研究は、ソーシャルワーク研究方法や理論構築を目指した研究に対して、チームワークやネットワーキングの研究、疾患別や施設別等に限定した実践技法研究、職業環境と業務上の倫理に関する研究に区分されたが、大別すれば、ソーシャルワーク理論や技法と、実践報告の二極化状態となる。ただ、ソーシャルワーク理論に基づく、実践現場の分析が無く、理論と実践の乖離が生じていたのに対して、本研究は乖離している実践研究と理論研究に跨るものとして注目に値するのである。

また医療ソーシャルワーカーの様々な活動を、実態と理論に基づき、「機能」として理論的に実証できるのであれば、それが専門性に繋がり得る。本論文は、筆者の十数年間の医療ソーシャルワーク実践に基づく研究である点に、大きな特徴がある。その後のさらなる医療ソーシャルワーク実践と筆者の考えを踏まえて本論文は進められている。本論文の研究方法においても、理論と臨床に跨り、双方に基づく実証的研究が顕著である。

本研究のフィールドワークは、在宅介護のニーズに関する研究と、退院支援における医療ソーシャルワーカーの果たす機能に関する研究という二つの実証的調査から成り立っている。調査の結果、患者や家族のニーズに対する医療ソーシャルワーカーの支援内容と、医療ソーシャルワーク理論に基づく「機能」を照合させ、医療ソーシャルワーカーの専門性を導き出した。このような実証研究を行ったのみならず、印象的な症例研究を加え、より説得的な説明に成功している。

これらの帰納法的研究を採用している点、さらに医療ソーシャルワーク支援過程を縦断的に分析した点が、今までの先行研究に無かった点である。過去、医療ソーシャルワーク研究が理論研究か事例報告かのいずれに偏重している中で、実践と理論をつなぐ研究を実施したことに、本研究の学問的意義と独創性があると言えよう。そして本研究の結果が、医療や福祉に従事している医療ソーシャルワーカーの専門家等に対し、医療ソーシャルワークの有効的活用の指標になり、医療ソーシャルワーカーの増加する離職に歯止めをかける一助に成り得るであろう。同時に、本研究は疾患に伴う障害者や要介護患者とその家族に対し、医療ソーシャルワーカーが現状に即した、効率的なオーダーメイド医療や介護体制を提供することが可能になる機能を有していることを示し、患者や

